大阪市
学校図書館活用推進事業
事例報告会

報告書

平成 28 年 10 月

大阪市教育委員会

はじめに

大阪市では、平成 27 年度から「学校図書館活用推進事業」を開始しました。本事業は、学校図書館の図書の整備と、学校図書館補助員・学校図書館補助員コーディネーターの配置の 2 本柱からなっています（事業の概要は 18 ページ以降をご参照ください）。

学校図書館補助員は、27 年 10 月から、大阪市立の小中学校に週 1 回配置しています。補助員の配置をきっかけとして、各校で学校図書館の環境整備、読書活動の活性化が本格的に進み始めています。また、学校図書館補助員コーディネーターは、補助員配置に先立ち 27 年 4 月に採用し、各市立図書館に配置して、担当する学校や区役所との連絡調整にあたり、同 10 月からは補助員からの相談対応や業務支援も担っています。さらに、各市立図書館の司書や区役所も、学校図書館に必要な支援を行っています。

この報告書は、28 年 6 月 23 日に開催した「学校図書館活用推進事業事例報告会」の模様を収録しています。報告会当日にコーディネーターが報告した各学校の取組みを主としつつ、活動を充実させるためのポイントを「視点」としてコメントを加えました。

各校での図書館活動、読書活動の推進に役立つことを願っています。

表紙の写真（上から）

松虫中学校
神津小学校
長吉西中学校

本冊子の PDF 版をインターネットでご覧いただけます。写真はカラーで収録しています。
大阪市立図書館ホームページ「学校図書館活用推進事業のページ」
http://www.oml.city.osaka.lg.jp/?page_id=1577

目　　次

学校図書館の模様替え・レイアウト変更を活用推進につなげた事例..... 3

授業での学校図書館活用・読書活動に向けた支援..... 7

教職員・ボランティア・補助員の連携..... 11

事例報告会次第・事業の概要（当日配付資料）..... 17

学校図書館補助員のしごと..... 20

学校図書館の模様替え・レイアウト変更を活用推進につなげた事例

小林小学校（大正区）

●家具が多く手狭な印象。大きな本が収まりにくい。
↓
○場所をとっていた事務机がカウンターに変身！　大きな本は棚板可変棚へ。
　案内表示（サイン）の整備で探しやすく・返しやすく。

報告者　西国原敦子（学校図書館補助員コーディネーター・大正区担当）

大正区のほぼ中央に位置しており、児童数は 236 名、今年創立 43 年を迎える学校です。電算化による貸出は平成 26 年度から行っています。

図書館は教室棟の 2 階、職員室のすぐ近くに位置し、子どもたちが利用しやすい場所にあります。広さは 1.5 教室分ほどです。

27 年 5 月時点での館内は、低学年用と高学年用の机と椅子が両方あり、使われていないパソコン用の机 4 台も加えていっぱいの状態でした。また、高さが調節できない本棚には大型本はまっすぐに立てられず、斜めになった状態で並んでいました。サイン表示が高い位置にあるなど、小学生の使い勝手に工夫の余地があるという印象を持ちました。

夏休みに行った図書館主任の先生との打ち合わせでは、悩みとして、「パソコン机を処分したいが、決めかねている」「少しずつ廃棄作業をしているが、なかなか進まない」「本の並び方を変えたいと思っているが、時間も人手もない」という点が挙がりました。また、図書館が開いていないときも読書に親しませたいという意図で、学校図書館から学級文庫へ多くの図書が貸し出されているということも伺いました。

27 年 10 月に学校図書館補助員が着任し、金曜日の開館、本の廃棄作業、掲示物などのディスプレイ、そして改装の準備として絵本を題名順に並べる作業などが補助員の仕事になりました。校長先生や主任の先生の要望をお聞きしたうえで自らもアイデアを出すという、補助員のコミュニケーション力により、図書館の様子は少しずつ変わっていきました。

改装に先立ち、蔵書全体の構成と収まり具合を見るため、学級文庫に貸出中の本をすべて返却するようにお願いしました。実際の改装作業は、補助員に加え、他区担当のコーディネーターの応援も得て、総勢 5 人でまる一日かけて行いました。コーディネーターは、様々な学校図書館に触れており、同じような困りごとのケースや解決策の情報も共有しています。別の学校で「不要なパソコン机を分解して他に活用した例」があり、それを伝えたところ、半円形部分と長方形を使ってカウンターに使用する案が浮かび、教頭と管理作業員とで見事に作りかえてくださったのです。古くなっていたカウンターと、残りの大型机は処分し、広いスペースが生まれました。

改装後の館内は、本棚の位置は変えていませんが、配列は、大型本を別にわけたうえであとは分類番号順に並べ替えました。パソコン机があったスペースは、今後ラグを敷いて、絵本コーナーになる予定です。サイン表示は、イラストも入れて見やすい場所に設置しました。

本は、入口から時計回りに分類法の順に並べ、棚に収まらない大型本は、表示をしたうえで、棚板が動かせる場所にまとめて置くことにしました。

「こんな本ない？」とか「この本どこに返すの？」という子どもたちの声に対して、アドバイスを行う補助員

がいることで、改装後も整備された状態をキープし、本を探しやすく、返しやすい図書館になっています。補助員はすっかり「図書館の先生」として子どもたちに受け入れられ、休み時間の来館者は確実に増えています。

先生方からは、「本の並びかたがわかりやすく、探しやすくなった」「補助員が作る飾りなどで雰囲気も良くなった」「子どもたちは、毎週金曜の休み時間に図書館へ行くのを楽しみにしている」との声があがっています。

小林小学校　（左）改装後の図書館の様子　（右）新しくなったサイン

やたなか小中一貫校（東住吉区）

●小・中で別々の図書館。一貫校のメリットを出したい。
↓
○やたなかの９年間を貫く大きな図書館づくり。読書推進に向けた年間計画も整備。

報告者　北川めぐみ（学校図書館補助員コーディネーター・東住吉区担当）

創立 140 年の矢田小学校と創立 43 年の矢田南中学校という伝統ある両校が、大阪市初の施設一体型小中一貫校として統合されてから今年で 5 年目になりますが、蔵書が小・中学校それぞれのものをもとにしたため、当初は小中それぞれに図書館が設けられていました。

先生方によると、1～6 年生では週 1 回の「図書の時間」の授業により読書習慣も定着し、今やたくさんの子どもたちが本を読む姿が日常的になっている一方、7～9 年生では朝の読書は定着しているものの、昼休みと放課後の図書館開放の来館者数は伸び悩んでいたそうです。ここに、一貫校の良さを取り入れようと、それぞれの読書習慣を融合させる“小中学校共通の図書館”を作ることとし、もともと面積の広かった中学校図書館を改装して「やたなか図書館」とする計画が立ち上がりました。27 年度の校長経営戦略予算（加算配付）により、魅力ある図書館作りが始まりました。

改装前の中学校図書館は、調べ学習のまとめも出来る大きな机と椅子が沢山で、中学生の学習環境としては充実しているものの、そのままで一貫校の図書館とすることはできません。そこで、新しい図書館には、身長の低い低学年児童でも楽に座れる椅子と机を新たに購入。従来の閲覧席と少し離れたところに配置することによって、2 クラスが並行して使用できるようにしました。窓辺の大きな出窓の前には思春期の中学生が静かに恋愛小説でも読みふけることができる読書スペースを新設。また、カラフルなスツールは、一緒に座って異学年が集う良さを活かせる、ふれあいの読書空間に。通路に点在させることで、元気な小学生が走り回ることの抑止にもなっているそうです。

一番のポイントは絵本コーナー前の畳スペース。寝そべったりあぐらをかいたり、自由な読書スタイルで癒しの空間を確保。補助員による読み聞かせや、縦割り班活動の読み聞かせの場としても利用でき、今後は先生方による紙芝居劇場も計画中だそうです。

悩みどころであった小中の蔵書の配置については、学習しているクラスの動線を妨げることがないような蔵書の配置にすることを何度も協議した結果、カウンターを図書館中央に移動させ、学習スペースと読書スペースを明確に分けることになりました。学習に直結する 0 類から 8 類までの蔵書を小中一緒にし、入口から奥の学習スペースへ行く動線に合わせて配置していきました。９類の文学は、読みやすい小学生向きの物語を絵本

コーナーに隣接して配置。中学生向けのものと区別しました。

一方、小中一貫した指導を進めるために、校内組織として「図書館活性化委員会」が新設されました。副校長以下、小中から 3 人ずつ図書館担当教員を選出し、活用計画や開館時のきまり・委員会活動など 9 年間の学校生活の中で読書活動の推進を話し合っています。

元気アップコーディネーターには、以前より月曜日の放課後開館をお手伝いいただいており、来館者アップに向けて、補助員と協力して掲示物や校内展示に取り組もうとしています。

補助員は、図書の時間の支援や昼休み放課後の開館はもとより、先生から授業に必要な本についての相談など、一つになった図書館の豊富な蔵書を学習に活かせるように力を注いでいます。

「やたなか図書館」を中心に、全校児童生徒・先生方がつながる、元気アップコーディネーターからボランティアの輪が広がる、その輪が地域にもつながっていく、など、さまざまな期待がふくらみます。まずはその基礎を固めるべく、「図書館活性化委員会」で決定した方針に沿って動き出した「やたなか図書館」の今後が楽しみです。

やたなか小中一貫校　（左）閲覧席とスツール　（右）畳スペース

ほかにも…

東三国小学校（淀川区）

改装の提案を行ったうえで、補助員とコーディネーター、管理作業員さんで図書館の模様替えを行いました。その後、図書館は明るくきれいで落ち着いた雰囲気になり、先生方や児童の利用も増えています。

井高野中学校（東淀川区）

本棚の高さに統一感が出るようにレイアウトを変更しました。その結果生まれた壁面スペースに、美術部の生徒が装飾を施す計画が立てられています。

東三国小学校

天満中学校（北区）

電算化導入に伴い、授業でも活用できる図書館を目指し、レイアウトの変更を実施しました。

学校からの、「一学級が授業で使えるための机、椅子の配置」「自習スペースの設置」「書庫コーナーの設置」などの要望をふまえ、レイアウトを変更しました。また、日本十進分類法による配列を補助員も一緒に行い、棚の分類見出しも作成しました。

視　点　学校図書館の模様替え・レイアウト変更を活用推進につなげた事例

○　学校全体で取り組もうという姿勢に向かっていること

これまでも各校には、図書館主任など、校務分掌としての図書館担当者はいましたが、授業の軽減もほとんどなく、図書館運営に関する研修も十分保障されない中、いわば孤軍奮闘している状況が続いてきました。結果、何から手を付けていいかわからない、他の仕事とのバランスを考えると図書館ばかりに時間を割けない、というのが、担当者となった教員の多くが抱いている率直な思いなのではないでしょうか。

この事業の開始をきっかけに、そうした担当者の悩みに寄り添いながら、状況の改善に向けて学校図書館補助員や学校図書館補助員コーディネーターが一緒に取り組む、ということができるようになっています。この項で紹介した模様替えのように、人手が多いほどスムーズに作業ができることはもちろん、作業にかかわった教員にも、作業を通じて「学校図書館って可能性があるな、授業に使えるな」と思ってもらうきっかけにすることができます。

学校図書館の活用は、担当者にとどまらず、できるだけ多くの児童生徒、教職員の利用があってこそ、その価値は高まります。そのためには、改装作業のような機会をつくることで、学校図書館運営を組織的に行っていく下地を固めていくことが効果的です。

○「ルールづくり」が重要

多くの児童生徒が、また教職員がそれぞれに、心から学校図書館の必要性を感じること、その有用性を理解することが、学校図書館活用の第一歩です。活用が進むにつれて問題になるのは、使いづらさの解消と、利用にあたってのルール作りです。各学校で受け継がれてきたやり方の中には、疑問を感じながらも変えずにそのまま、ということも多いと思います。出発点として、使いづらい点の原因を関係者で出し合ってみてはいかがでしょう。そのうえで、図書の並べ方、貸出や返却の手続き、マナーを守ることなど、ルールを作る作業を始めるのが得策です。

ルール作り、決めたルールの周知、児童生徒への指導など、必ず組織的に対応していかなければならず、結果的に「図書館活性化委員会」等の校内組織を設ける動きにつながります。図書館担当教員や学校図書館補助員のほか、必要な時には学校図書館補助員コーディネーターや市立図書館司書を呼んで助言を求めるなどすれば、話し合いに広がりを持たせることもできます。

○「補助員がいることで、改装後も維持していける」ということ

模様替えなどによって、きれいで使いやすい図書館ができたら、それをどう維持するか、ということが大切です。これまでにも、学校図書館の模様替えをしたいという学校に対し、市立図書館や指導部が支援してきましたが、そこで異口同音に聞かれたのは「きれいに並べてもそのうちまたぐちゃぐちゃになる」という先生の声でした。この懸念はある意味もっともなことで、いつまでも使いやすい状態にする仕事は誰の仕事？、となったとき、やはり図書館主任の教員だけの手には負えない部分があります。

ここで、補助員の登場です。「たかが週一日、されど週一日」、例えば、必ず毎週１回、紛れていた本が所定の位置に戻る、ということは、やろうと思ってもなかなかできなかったことではないでしょうか。

このように、レイアウト変更や整備を行い、分類等の基準決めをし、それが補助員によって継続されるようになれば「ずっと使いやすい図書館」を維持していくことは、それほど難しいことではありません。

その他、図書館内の窓拭き・カーテンの洗濯などの掃除や日本十進分類法にのっとった本の並べ替え、古い本の廃棄のお手伝いなど、各校担当補助員・担当区のコーディネーターは環境の向上に力を入れてきました。それは、先生方からの図書館をもっときれいにしたい・子どもたちが沢山利用する図書館をつくりたいという熱意に動かされたというのも大きな要因です。全ての想いをつなぐ学校図書館を今後とも一緒につくっていければと思います。

授業での学校図書館活用・読書活動に向けた支援

福小学校（西淀川区）

●改装できれいになったが、利用方法やルールが子どもたちに浸透しない。
↓
○「オリエンテーション」の実施で児童・教職員の理解の共通化。利用もスムーズに。

報告者　前田朝美（学校図書館補助員コーディネーター・西淀川区担当）

28 年 5 月、全学級に対して「学校図書館オリエンテーション」を実施しました。

福小学校は昨年度、校長経営戦略予算（加算配付）を活用した図書館改装を行い、新しい本や書架などが入りました。子どもたちが喜んで本を読める環境が整いました。しかし、図書館内での過ごし方や本の貸し借りの仕方、本の分類についてなど、利用方法を子どもに周知できていない状態で、学校から改善策について相談を受けました。

そこで、学校図書館補助員による「オリエンテーション」、つまり学校図書館の使い方やルールの説明会の実施を提案し、図書館主任の教員・補助員・コーディネーターの３人で具体的にオリエンテーションをどのように進めていくか検討することになりました。また、区内の他の補助員も同じようにオリエンテーションが行えるようになることを視野に、準備を進めました。

オリエンテーション実施に向けた補助員の準備

まず、日常の業務の中で感じている、「図書館の使い方について児童・生徒に伝えておくべきこと」を補助員から聞き取り、オリエンテーション用の資料作成に活かしました。28 年 4 月には、西淀川図書館長を講師に「図書館見学に来た小学生向けオリエンテーション」についての補助員研修を開催しました。補助員は、オリエンテーションについてイメージができたようでした。一方、福小学校では、オリエンテーション実施の前提として、図書館の使い方のルールをきっちりと決めていただき、教職員全体で共通認識となるよう周知していただきました。

当日は、補助員の勤務日に合わせて全学年 6 学級で図書館での授業を設定（1・2 年生は合同）し、図書館の使い方のルールと本の分類について、オリエンテーションを実施しました。本の分類については、利用の多い、物語の 9 類・理科の 4 類をメインに紹介しました。各グループに 9 類と 4 類の本を 1 冊ずつ配り、実際に子どもが本を手に取れるようにしました。オリエンテーションの時間は 10 分前後でした。みんな楽しそうに、興味を持って聞いていました。

その後の変化

オリエンテーション終了後から早速「いすは元にもどさないとだめだよ！」と声をかけあう様子が見られました。図書館に来る子どもは、全体的に落ち着いて静かに本を読んでおり、本を次々と借りていく子もいます。本が出しっぱなしになっていれば、自分のでなくても本棚に戻したりもしています。返すところが分からない本用の棚を設置しています

福小学校　オリエンテーション当日の様子

が、そこに本がたまっていくことはないそうで、きちんと自分たちで返すことができています。また、毎週火曜日はいつでも図書館が開いていることも周知され、来館者も増えました。先生も補助員も、オリエンテーションの手ごたえを感じているとのことです。

東我孫子中学校（住吉区）

●独立した建物の図書館で蔵書も豊富だが、使いやすさに工夫の余地あり。
↓
○案内表示を整備したうえで「オリエンテーション」を実施。来館者数も右肩上がりに。

報告者　西本みどり（学校図書館補助員コーディネーター・住吉区担当）

生徒数 423 名で 1 年生 3 クラス、2・3 年生各 4 クラスの計 11 クラス。図書館は市内でも珍しい独立した建物で、広く明るい館内が特徴です。蔵書数が多く、入口を入ると中学生向けの新刊本やクラブ活動むけの最新刊の雑誌も陳列されており、常に一定の来館者がある状態でした。ただ、館内のディスプレイやレイアウトを工夫すれば、さらに生徒が親しみやすい図書館になるのではという印象がありました。

学校図書館補助員の着任をきっかけに、図書館主任の先生の指導のもと、生徒に何度も足を運んでもらえるような館内環境の充実に取り組むことにしました。

具体的には、新着本の紹介 POP の作成、時期に合わせた図書のコーナー展示、補助員おすすめ本のコーナーづくりなどです。定期テスト前には「勉強法コーナー」も作りました。合わせて、日本十進分類法に基づく配列の案内表示をわかりやすくし、分類法を解説した手作りポスターも掲示しました。

また、新年度からカードを使用した図書の貸出方法を簡略化したので、その内容を生徒に伝える図書館だより「ライブラリーインフォメーション」を全校生徒に配りました。文字を少なくイラストを使って、図書館に入って入館票を書くところから貸し出し返却方法まで、わかりやすい表現を心がけました。この資料を使った新入生への図書館オリエンテーションは補助員のいる金曜日に実施し、利用方法の説明を補助員が受け持つことになりました。東我孫子中学校では毎年 1 年生の国語の授業で図書館オリエンテーションをしてきました。28 年度は 5 月 6 日に実施することになり、1 年国語科の先生との打ち合わせのもと、「図書館利用のルール」「貸し出し方法」や教科書にも掲載されている「日本十進分類法」については補助員が説明しました。この日は朝から生徒たちは図書館に行くのを楽しみにしており、大変熱心に説明に聞き入っていました。またこの時、その場で全員に 1 冊ずつ本を借りてもらうことにしました。貸出方法をしっかり覚えてもらうためと、これからも図書館に足を運びたくなるように本をよく知ってもらい、自分の図書カードが白紙のまま卒業するような生徒をなくしたいためです。

中学校に進学したばかりの 1 年生にとっては、小学校と比べると本も多く、内容もぐっと大人向けであり、新鮮な気持ちで本を選んでいたようです。

図書館の来館人数は、補助員配置以降右肩上がりの方向に進んできています。最近では、図書館の外にある掲示板にクイズを出して、答えを図書館で発表するなど、まずは足を運んでもらうためのしかけづくりも行っています。

図書館主任の先生いわく、「掲示物を積極的に作ってもらえるのはとてもありがたい。放課後開館時は『クラブに行く前に図書館に行こう』とお互いに声を掛けあう生徒もでてきた」とのことです。

東我孫子中学校　オリエンテーション当日の様子

ほかにも…

城東小学校（城東区）

城東小学校でも新学期に補助員によるオリエンテーションを行いました。対象は主に新１年生です。

補助員は、説明用に背表紙に十進分類の番号の大きなシールが貼られた大きな本を作成しました。これを使って、本を返す場所について、目で見て分かりやすく説明しました。オリエンテーションの甲斐あって、１年生の子どもたちは、正しい場所に本を戻すことができています。また、先生方からは、「説明が低学年にもわかりやすく、初めに教えてもらえれば後で戸惑うこともない」と好評でした。

築港小学校（港区）

始業前の時間を利用して各クラスを補助員が巡回し、授業に関連する図書の紹介を行っています。
事前に担任から単元名を聞き取り、その中から学校図書館で資料が揃いやすいものを補助員が選び、関連図書を紹介する単元として提案します。これまでに、歴史に関する本をクイズを用いながら紹介（高学年）、体の仕組みに関する本の紹介（中学年）、並行読書につながる物語・絵本の読み聞かせと紹介（低学年）などを行っています。紹介した資料は好きな時間に読めるよう翌週まで教室に置いたままにします。読んだ感想を投函できるポストを設置しており、楽しんで書いてくれる子どもが多くいます。複数冊を提出した子どもの感想用紙に王冠マークを付けて、図書館入口付近に掲示をします。次回はたくさん読もう！と言った声も聞こえてきているとのことです。

長吉西中学校（平野区）

女子バスケットボール部が、顧問の先生の声かけで、体育館を使用できない木曜日の練習前の 30～40 分間、図書館で読書をしています。落ち着いて読書するのが定着しつつあります。中学校では、クラブ活動をはじめ、放課後学習などさまざまな活動があり、学校図書館を開館してもなかなか利用者数を伸ばすことが難しい場合があります。そのような中でも、この例のように有効に活用できるケースもあります。指導者側がワンポイントの配慮を効かせることで、十分に読書に親しむ姿勢を育てることができるということです。

瓜破中学校（平野区）

図書館を利用した授業の後に、図書館への来館を促しています。

たとえば、美術の授業で先生が作品作りの参考資料として、『ミッケ』（絵本）を学校図書館から数冊持ち出して授業で使い、「このシリーズは図書館に」との案内をしてもらいました。また国語の授業で、詩、小説、説明文と単元ごとに関連した本を教室で紹介したところ、生徒にも好評だったので、図書館の一角にコーナーを作って図書の展示をしました。

真住中学校（住之江区）

バーコード化に伴う作業を“パソコン部”が行うことによって、部員十数名が図書館の常連さんになりました。作業中に面白そうな本を見つけたということもあったようです。自分たちで整備した図書館、という愛着のようなものが育ったということでしょう。

（左）瓜破中学校 関連図書の展示　（右）真住中学校 生徒も交えてバーコード化作業

視　点　*授業での学校図書館活用・読書活動に向けた支援*

○　図書館活用のきっかけを

特に中学校では、「まずは生徒たちに、図書館の扉をたたいてもらうこと」が重要です。給食開始やクラブ活動など、時間的・物理的な困難要素をかかえながらも、授業やクラブ活動の中で図書館利用のきっかけをつくることで生徒の図書館利用を促し、学力の向上に結び付けるとともに、好きな本を読んでほっとできる場として図書館を活用しようという学校が増えていることに注目していただければと思います。

図書館の使い方を教えたい、授業で使いたい、もっと楽しい図書館にしたい、など、学校の思いを受けて、その思いを実現するために、補助員は、コーディネーターや市立図書館司書とともに支援していきます。一人でも多くの子どもが学校図書館を活用したいと思える図書館をつくっていきたいと考えています。

○　図書館利用のルールについて、教職員と児童生徒が共通理解することの大切さ

オリエンテーションにおいて、児童生徒と教職員が同じ場でルールを知り、理解することで、教職員は図書館の利用についての適切な指導に結び付けることができます。年度当初など、定期的に図書館オリエンテーションを実施することは、教職員にとって、図書館運営への理解や活用促進という意味でも効果的です。

○　児童生徒に図書館の存在をアピールすること

補助員を活用して、図書館を魅力ある場所にできたら、今度は掲示板や校内放送、図書館だよりなどで図書館の認知度をあげていくことも重要です。例えば、登校時の玄関に看板を出す、開放している休み時間に放送を入れるなど、ささやかな取組みをきっかけにしながら、子どもたちの心に図書館を根付かせることが大切です。

そのためにも、教師自身が図書館に出向いて、本棚を眺めてみてください。「もっとこんな本があったらいいのに」と職員室で話題にしたり、「こんな本があるから図書館に行ってみたら」と生徒に声掛けしたりすることが、地味ではありますが、図書館の活性化に着実につながるのではないでしょうか。

教職員・ボランティア・補助員の連携

友渕小学校（都島区）

●分校に比べて本校の学校図書館の整備に遅れ。
↓
○分校のボランティアの力も得て、本校での協力体制が確立。読書環境が大幅に改善！

報告者　新宮真子（学校図書館補助員コーディネーター・都島区担当）

児童数 1,478 名の大規模校で、4 年生から 6 年生の本校と、1 年生から 3 年生の分校に分かれています。2 つの校舎は 700m ほど離れています。学校図書館はそれぞれの校舎に配置されており、図書館主任もそれぞれにいます。本校と分校には同じ学校図書館補助員が週 1 日ずつ勤務しています。本校は、先生と図書委員の児童のみで学校図書館の運営を行っていました。分校には、「よむとも」という図書ボランティア組織があり、学校図書館の運営をサポートしています。

27 年 5 月時点での本校の図書館は、本をケースに入れたまま配置している、手に取りやすい位置の書棚に廃棄予定の本が詰まっていなどの状況が見られました。図書館主任の先生や図書委員の児童だけでは書棚の整理や本の紹介といったところまでは手がまわらない、といった様子でした。

同年 10 月から補助員を配置しました。本校での業務の当面の課題は、(1)館内の掃除、特に、図書を乾拭きすることで館内の埃っぽさを軽減する　(2)書棚の中の不要なものを処分し、わかりやすい配架に変える　の 2 つでした。複数人数で進めたほうがより早く作業がすすめられる、と補助員から提案があり、補助員以外の人が作業に加われば、学校全体で課題の共有ができると考えました。そこで、分校で定期的に開催されるボランティアと図書館主任の先生による定例会に、補助員とコーディネーターが出席し、本校の現状を報告するなかで、作業を手伝ってくれる方を募りました。即座に 2 人が、本校のボランティアとして来てくださることになりました。

友渕小学校本校
(上)ビフォー　(下)アフター

27 年 12 月には、本校図書館の大掃除を実施しました。当日は分校ボランティアも多数手伝いに来てくださり、長年磨いていなかった館内上部のガラス窓なども拭いて、埃っぽさがかなり改善されました。

配架替えについては図書館主任から、「図書の入れ替えはよいが大規模な書棚の移動は避けたい」との意向が示されていたので、現在の配列をなるべく生かした配架案を補助員とコーディネーターとで作成し、ボランティアと協力して作業しました。分校で、補助員がボランティアと一緒に業務を行うことで信頼関係を築けたことが、結果的に本校の整備において大きな力となりました。

週一回補助員出勤日ごとの作業ですので、完了まで半年かかりましたが、配列が固定した 28 年度は、補助員は館内マップの作成や、図書館の外の廊下への掲示にも力を入れています。

その後も、ボランティアと補助員が連携して館内の環境整備を進

めています。汚れた壁紙の上に、空色の模造紙を貼った結果、室内が明るくなりました。模造紙の一部にブックコートフィルムを貼ることで、セロハンテープなどでの貼替えが簡単に行えます。低予算で、簡単に室内の雰囲気を変える方法としておすすめです。模造紙はボランティア２人と補助員で、２時間ほどかけて貼りました。

図書館入口には展示コーナーを設け、ボランティアと補助員が協力してタイムリーなテーマ（例えば「伊勢志摩サミットとオバマ大統領の広島訪問」など）で、本棚から本を集めて並べています。

今回、整備が進んだ要因は、(1) 補助員が関係者とコミュニケーションをとることを第一に考えた (2) 支援してほしい内容を学校が上手に示すことで、呼応してくれるボランティアを見つけることができた (3) 教職員、ボランティア、補助員、コーディネーターでの定期的な話し合いができた などがあげられます。

野田小学校（福島区）

●収まりきらない本をどう並べるかが悩み。代本版もいずれ廃止したいが…
↓
○蔵書を精査しスペースを確保。分類順の配列で代本版が不要に。

報告者　中西淳美（学校図書館補助員コーディネーター・福島区・此花区担当）

児童数 658 名、20 学級の学校です。学校図書館は別館 3 階にあり、約 1.5 教室分の大きさです。学校図書館のほかに玄関に読書スペースを作ったり、学校独自の読書週間を年 3 回実施したりするなど、読書活動推進に熱心に取り組んでいる学校です。

かねてより「模様替えをしたいという思いはあるが、狭く、難しさを感じている」という学校の声を聞いていました。児童数に対して図書館が小さいため、棚の上に本を並べてもなお、本が入りきらない状態でした。また、借りた本の場所に代わりに差し込んでおく「代本板」について、結局は毎回どこに入れたか探すことになるので、いずれは廃止したい、というお話もありました。しかし分類法に基づいて配架されていない本がたくさんあり、今のままでは代本板なしでの貸出返却は難しいとのことでした。

学校図書館補助員は 27 年 10 月から業務を開始しました。本の並びが分類順でないため、本の場所を聞かれても答えられないことに悩んでいました。このことを念頭に図書館の環境整備を行うことを学校に働きかけ、実行することになりました。

まず、使わなくなったビデオテープを本棚から撤去し、本を並べる場所を確保しました。次に、カウンター後ろでの作業が円滑に行えるよう、廊下で辞書入れに使っていた本棚を活用して仮置き棚を設置し、修理中、受け入れ待ちの本などを置く場所にしました。冬休みには、いずれは図書館の本を日本十進分類法に統一して並べたいという学校の考えに基づき、本の並べ替えをしました。まずは補助員とコーディネーターで、分散していた物語の本を並べることから着手しましたが、物語の本をひとまとめにするには他の本も動かさなくてはならなかったため、結局、館内すべての本を日本十進分類法に並べなおすことにしました。予定より大掛かりな作業になりましたが、図書担当の教員や児童も手伝いに駆けつけてくれ、学校を挙げての作業となりました。作業をきっかけに、それまで補助員とあまり接点のなかった先生方からも、声をかけていただくことが増えました。

野田小学校

また、配架が整ったことを機に、代本板の利点と欠点について検討され、新年度から廃止することになりました。廃止にあたっては、図書担当の先生方が校内研修を開かれ、本の並び方や新しい利用方法について周知されました。そのため、4 月から児童が図書館を使うときにも、大きな混乱はありませんでした。これまで、本がどこにあるかを児童が自分で探すのには時間がかかりましたが、補助員に尋ねれば「何番の棚を探してみて」というように教えてもらえるようになり、探しやすくなったという声が聞かれました。また、返却の際、「代本

板のあったところに返す」から「ラベルを見て返す場所を探す」に変わったことで、シリーズ本を番号通りに並べなおしたり、分類番号を意識したりする児童の姿が見られるようになりました。

補助員の配置によって、それまで図書館主任の先生が、担任をしながら限られた時間の中で取り組まれてきたことも、補助員が継続して当たることができるようになりました。また、補助員の提案をきっかけに、校内での課題整理、改善策への着手が実現し、学校図書館に大きな動きが生まれました。

日本橋小学校（浪速区）

●充実した設備や蔵書を活かした授業を深めたいが...
↓
○入念かつ効率的な打ち合わせを経て、関連図書の紹介など、児童の興味の広がりに応える授業に。

報告者　本橋範子（学校図書館補助員コーディネーター・天王寺区・浪速区担当）

図書館の環境整備

日本橋小学校の図書館内は、もともと分類ごとに本がわかりやすく並べられており、国語の教科書の関連図書の棚がありました。調べ学習用の本もとても充実しています。また、パソコン教室も併設されています。これらの充実した設備や蔵書を生かした授業への支援が、学校図書館補助員業務の中心となっています。

具体的な工夫

全学年単学級の日本橋小学校では、割り当てられた図書の時間以外に、図書館を活用した授業を補助員配置日に行っています。図書館主任が作成した用紙に、学年と授業内容、補助員にしてほしいこと（Ａ調べ学習への協力　Ｂブックトーク　Ｃ読み聞かせ　Ｄ図書の時間への協力）を、担任が記号で書き込みます。読み聞かせにとどまらず、さまざまな授業支援をしてほしいという補助員への期待が見てとれます。

わずか 1 枚の紙ですが、とても大きな役割を果たしています。事前に予定がわかるので、補助員は仕事を見通せて、短い打ち合わせでも授業支援がしやすいのです。教員にとっても、本をどの授業で活かすか学期単位で考えられます。

授業支援の実際

授業支援の実際を紹介します。5 年の社会「米作りの調べ学習」では、事前打ち合わせで担任から補助員に、単元の学習内容、調べたい事柄、米作りを学校で行っていることなどを、教科書を示しながら説明がありました。これに基づき、補助員は関連図書を揃えました。

授業では、担任からの学習のめあての話の後、米作りの本を補助員が紹介しました。《田んぼは、お米を作るだけでなく自然環境の中で大きな役割があります。それは次のうちどれでしょう。(1)水害を防ぐ (2)地震を防ぐ　(3)風を防ぐ》といった三択クイズも織り交ぜました。担任からは「本を紹介してもらうと児童は調べようとする意欲が高まり、なにを調べるか考えやすくなる、どの本に何が書いてあるかわかるのも役立つ」という感想がありました。

6 年の国語「詩を味わおう」では、担任は読み聞かせによる支援を希望しました。補助員は、ただ詩を読むだけでは児童の心に残らないのではないかと考え、相談を受けたコーディネーターは、「5 年で習った宮沢賢治を児童に思い出してもらうのを導入に詩を朗読し、共感しやすい他の作家の詩に繋げていってはどうか」と勧めてみました。授業の当日は、補助員からいくつかの詩を紹介し、印象に残ったものや感想をメモしておくようにと児童に指示がありました。気に入った詩を一人ずつ朗読したり、詩のコピーを先生に頼んだりする児童もいました。授業に参加することで、補助員も手ごたえを感じたようで、子どもの様子がわかったので次回はさらによい活動をしたいといった感想を述べていました。

日本橋小学校では、年度初めの職員会議に「学校図書館の利用及び年間計画」が提示され、授業支援についてという項目の中で、補助員に授業支援をお願いすることと、教科の指導計画と照らし合わせて予定を記入するようにと明記されています。これが日本橋小学校の図書館活用の特徴を示しています。

今後さらに、図書の紹介や読み聞かせ、児童への個別の支援といった面で先生方の授業を豊かにするお手伝

いができていくのではないかと展望しています。

平成28年度 学校図書館補助員活用計画(1学期)　A調べ学習への協力、Bブック

(学期に2回

4月		時間	学年	内容	時間	学年	内容
13	水	5	3・4	A バリアフリーについて			
20	水						
27	水	2	3・4	A 学校図書館へ行こう	1	2	としょかんへ行こう B

5月		時間	学年	内容	時間	学年	内容
4	水						
11	水	4	2	生活科、ていねいの相談 B			
18	水	4	6	対面朗読のおうぼ			
25	水						

6月		時間	学年	内容	時間	学年	内容
1	水	2	5	対面朗読 本づくり A			
8	水						
15	水	4	6	説明文を読んで感想をもとう C			

日本橋小学校　(左)補助員の活動計画（4 月 13 日の 5 時間目は 3・4 年の「バリアフリーについて」）
(右)実際の授業支援の様子

ほかにも…

神津小学校（淀川区）

学校図書館は校舎の 3 階という位置で、かつ床材や家具に経年劣化がみられるなど、使いやすいとはいえない面がありました。27 年度に、校長経営戦略予算(加算配付)による全面改装が決定し、床はカーペット敷きになり、書架や机、椅子も新調されました。図書の入れ替えやサイン、案内板の作成は、教職員、ボランティア、補助員が協力して行いました。コーディネーターは、新しい図書館の書棚配置や図書配列の案を作成しました。

児童は図書館の改装をとても喜び、利用率も増加しました。28 年 4 月から、開館を担うボランティアも増えました。

九条南小学校（西区）

図書担当の先生が 3 人おり、読書や調べ学習に以前から力を入れている学校です。26 年度に図書館改装をし、すでにハード面は整っている中に補助員を配置しました。担当の先生と補助員との相談の結果、補助員の最初の業務は「図書館のキャラクターを作ること」に。名前は児童からの応募で「ほっこちゃん」に決まりました。

オリジナルキャラクターがあることで、児童がより学校図書館に親しみを持ち、掲示物や、よく本を読んだ児童に渡す表彰状などを作成するときにも助かっているそうです。

九条南小学校　キャラクター「ほっこちゃん」

茨田小学校（鶴見区）

環境整備や読書活動推進に熱心に取り組んでおり、補助員には、児童への読み聞かせや本の紹介といった支援を第一に希望されていました。低学年に対してはボランティアが毎月読み聞かせを行っていましたが、高学年にも何かできないか、ということで、補助員がブックトークを行うことになりました。低学年で読み聞かせを経験していることもあり、児童には聞く姿勢が育っていて、反応は良好でした。

また、月に一度は、図書館主任・ボランティア・補助員の三者でミーティングを行っています。定期的に、情報交換や課題整理をすることで、学校図書館での活動をよりスムーズに行うことが出来ています。

鶴橋中学校（生野区）

学校図書館の床を貼り替えたり、校内３箇所にブックサロンという読書スペースをもうけたりするなど、読書環境の整備に熱心に取り組んでいますが、図書館が普通教室から遠く、なかなか生徒が来ないという課題を抱えていました。

そこで、元気アップコーディネーターと補助員が組になって給食時間にクラスを訪問し、本の紹介を行いました。この取り組みによる宣伝効果は抜群で、図書館に来る生徒が増えてきています。さらに先日は、まんが『ちはやふる』に合わせ、柔道畳を図書館に持ち込み、百人一首大会を放課後に行いました。

梅南中学校（西成区）

元気アップコーディネーターと補助員が、1 年生に向けたオリエンテーションを担当しました。事前計画と、当日の図書館でのルールやマナーについての説明は元気アップコーディネーター、十進分類法、書架についての説明は補助員が行いました。

また、オリエンテーションとあわせて「お試し読書」という取り組みもしました。「お試し読書」とは、用意された本の中から直感で 1 冊を選び、5 分間読んで感想を書く、というものです。普段選ばないような本に出会い、次なる「読書」への一歩にすることがねらいです。当日は、楽しそうに取り組む生徒の姿が見られました。

松虫中学校（阿倍野区）

電算化を機に学校図書館の全面リニューアルを実施しました。学校図書館コーディネーターと元気アップ地域コーディネーターが調整を行い、それをもとに元気アップコーディネーター・ボランティア・補助員の役割分担を図書館主任が調整しました。図書の整理・修理は元気アップ、全学年での読み聞かせなどはボランティア、館内ディスプレイやテーマ展示は補助員の役割と決まり、それぞれの取り組みに集中できる環境が整いました。開館業務も分担し、始業前開館を含め、読書環境・読書活動の活性化を実現しています。

東桃谷小学校（生野区）

４年の国語「走れ」にあわせて、“心情が変化するような本”を並行読書用に 30 冊準備してほしい、という依頼が補助員に寄せられました。生野図書館にも相談して、団体貸出の本も含めて用意しました。教職員と補助員・コーディネーター、市立図書館がつながることで、よりよい形で授業に活かすことができました。

敷津浦小学校（住之江区）

図書館主任が中心となり、「図書の時間」の支援に補助員の力を積極的に活用されています。図書館主任は、全クラスに「図書の時間」が割り当てられるように調整されています。補助員は学年に応じた本を選び、授業で読み聞かせなどを行っています。

先生からは、本をよく知っている補助員の読み聞かせや新刊紹介を児童も楽しんでいると伺いました。また、児童の様子を見た先生も改めて図書の時間の大切さを感じたり、児童の反応に驚いたりされているようです。学校全体の協力と理解が補助員の力を活かすことに結びついています。

敷津浦小学校

視　点　*教職員・ボランティア・補助員の連携*

○　学校図書館に関わる人たちのコミュニケーションの深化

補助員１人が週一回の勤務でできることには限りがありますが、教職員、ボランティア、補助員、コーディネーター…といった、大阪市の学校図書館に関わる人たちがコミュニケーションを図り、「互いのできること」を把握し、時には合同で作業することで、子どもたちがより使いやすく、利用したくなる学校図書館が実現できると感じています。それぞれやるべきことを明らかにしたうえで連携し、継続的に学校図書館に関わっていくことで、これまでできなかったような新しい取り組みに挑戦できる学校が増えました。今後は、補助員の資質向上とともに、よりよい連携を探り、学校図書館のさらなる活用へとつなげていきたいと考えています。

○　さまざまな角度からの見つめなおし

意外と「以前からそのやり方だから」とか「それが当然だから」とかいう決めつけがあるのではないでしょうか。例えば代本版について、単純にその是非を論じるのではなく、それが何のために存在していて、どういった効果をもたらしているのかということを見つめなおすことが重要です。その議論の結果として、代本版を使い続けるかどうかを決めていく、というプロセス自体が、意味のあるものになると思います。

ボランティアや補助員、市立図書館の関わりにより、別の角度が加わり、アイデアを出しながら改善に結びつけていく、ということが大切です。

○　打合せが補助員業務の基盤

先に紹介した日本橋小学校の図書館主任からは、「あくまでも小規模校だからできる活動だ」と伺いましたが、十分な打ち合わせをしたうえで補助員が業務にあたることは、どんな規模の学校でも大切なことだと思います。教員が多忙な中、補助員と勤務日ごとに打合せを行うというのはなかなか難しい状況がありますが、活動日誌や連絡ノートを活用すればある程度補えます。より的確な補助員業務に結び付けるために、学校の方針を補助員に十分伝えていただくようお願いします。

大阪市 学校図書館活用推進事業
事例報告会

平成 28 年 6 月 23 日(木)　15:00～17:00
於：大阪市立中央図書館 大会議室

次　　第

1　開会あいさつ　　中央図書館長　松　本　勝　己

2　事業概要ならびに経過報告　　中央図書館担当係長　戸　倉　信　昭

3　事例報告（学校図書館補助員コーディネーターによる報告）

(1)　学校図書館の模様替え・レイアウト変更を活用推進につなげた事例

・小林小学校ほかの事例　　大正区担当　西国原　敦　子
・やたなか小中一貫校ほかの事例　　東住吉区担当　北　川　めぐみ

(2)　授業での学校図書館活用・読書活動に向けた支援

・福小学校ほかの事例　　西淀川区担当　前　田　朝　美
・東我孫子中学校ほかの事例　　住吉区担当　西　本　みどり

(3)　教職員・ボランティア・補助員の連携

・友渕小学校ほかの事例　　都島区担当　新　宮　真　子
・野田小学校ほかの事例　　福島区・此花区担当　中　西　淳　美
・日本橋小学校ほかの事例　　天王寺区・浪速区担当　本　橋　範　子

(4)　まとめ　　中央図書館担当係長　戸　倉　信　昭

4　閉会あいさつ　　中央図書館地域サービス担当課長　宮　田　英　二

事業の概要

■学校図書館活用推進事業

(1) 学校図書館図書整備

学校図書館には、読書意欲の向上や読書習慣をつけさせる「読書センター機能」、各種の資料やメディアを提供し学習を支える「学習センター機能」、情報活用能力の育成を支える「情報センター機能」があり、これらの役割を果たすためには、蔵書の充実をはじめとする読書環境の整備が必要です。本市の学校図書館において必要であると考える蔵書冊数を、小学校で7,000冊、中学校で8,000冊として、それらの冊数を大阪市図書標準とし、この標準に達していない小中学校に対して、不足分を充足するため、3カ年計画で予算を配当し、図書整備を行います。

(2) 学校図書館補助員ならびに補助員チーフコーディネーター・補助員コーディネーターの配置

学校図書館の開館回数を増やすとともに児童生徒の読書活動を推進する魅力ある学校図書館づくりを行うため、平成27年10月から、学校図書館補助員（平成28年度149人・非常勤嘱託職員）を配置しています。また、補助員のサポート体制として、学校図書館補助員チーフコーディネーター（3名・校長OB・非常勤嘱託職員）を中央図書館に、学校図書館補助員コーディネーター（24名・非常勤嘱託職員）を各市立図書館にそれぞれ配置しているほか、中央図書館に「学校図書館支援グループ」を設置しています。

目標

１．大阪市図書標準に達している学校の割合を平成29年度までに100%にする。
２．平成29年度までに「読書は好きですか」という質問に対する肯定的回答のポイント数について、全国平均以上にする。
３．平成29年度までに「全国学力・学習状況調査」の結果における大阪市平均を全国平均以上にする。
４．平成29年度までに、各小・中学校の学校図書館を全授業日に１日１回以上開館し、週あたりの開館回数は平均７回以上とする。

平成27年度　全校の開館回数の平均を７回以上とする
平成28年度　全校で開館回数を７回以上とする
平成29年度　全校で全授業日開館し、開館回数を７回以上とする

※小学校は一日４回（始業前、2時限目と3時限目の間の業間休み、昼休み、放課後）＝週あたり20回のうち７回
※中学校は一日３回（始業前、昼休み、放課後）＝週当たり15回のうち７回

・事業開始前は、小学校で平均4.5回、中学校で平均5.5回。
・平成27年度末は、小学校で平均6.5回、中学校で平均6.1回。

現在、各校から提出を受けた「平成28年度 学校図書館活動計画」に基づき、目標達成に向けた調整・協議を進めており、合わせて、区と連携して支援ボランティアの募集を行うなどの支援を行っています。

■実施体制と業務内容

学校図書館補助員（149 名・非常勤嘱託職員）

・開館や貸出・返却業務
・図書の配架調整、ディスプレイの作成、本の修理等図書館の環境整備
・図書の受け入れ、廃棄、図書原簿の管理
・学校図書館支援ボランティアとの連携・協力、参加促進への協力
・図書の時間の時など見守り等、学習支援
・担当教員との連絡調整、研修会や補助員連絡会への参加等

学校図書館補助員コーディネーター（24 名・非常勤嘱託職員）

◆担当する学校との連絡調整、相談・支援
・学校図書館の環境整備、運営にかかる連絡調整、相談、支援
・学校図書館蔵書の選定・廃棄についての助言
◆地域との連携・協力
・学校図書館支援ボランティアの参加促進への協力
・区役所との連携・協力
◆学校図書館補助員への業務支援
・学校図書館補助員の配置調整、勤怠処理等庶務的業務
・学校図書館補助員への図書館業務研修の実施
・学校図書館補助員からの相談対応、業務支援
◆各学校の読書活動への協力・支援
・学校図書館を活用した教育実践、読書週間での取り組み等への協力

学校図書館補助員チーフコーディネーター（3 名・非常勤嘱託職員）

◆コーディネーター業務の管理
・コーディネーター研修、連絡会議等の企画・実施
・コーディネーター業務の進捗管理、指導助言
・学校からの相談対応、指導助言
・コーディネーターの勤怠処理等庶務業務
◆学校図書館リニューアルモデル事例、学校図書館蔵書更新のモデル事例等の収集
◆学校と市立図書館との連携・協力についての助言
・学校における市立図書館のサービス活用事例の収集、報告

（事務局）中央図書館 地域サービス担当 学校図書館支援グループ

地域サービス担当課長（司書）― 地域サービス担当課長代理（司書）
└担当係長（司書）― 係員（司書）
主任指導主事（教員・2 名・指導部主任指導主事兼務）
担当係長（社会教育主事・1 名・生涯学習部担当係長兼務）

学校図書館補助員の“しごと”（補助員研修での配付資料より）

学校図書館補助員の“しごと”

H27.10

学校図書館補助員の業務内容

○　基本的な“しごと”

図書館開館の“しごと”

学校図書館の開館（始業前・休み時間・昼休み・放課後）、貸出・返却、図書の配置場所の案内

図書館整備の“しごと”

館内の整理整頓、掲示物の作成、展示

つなぐ“しごと”

学校図書館の活動を支援するために、必要があればコーディネーターや地域図書館・中央図書館につなぎ、サポート体制をつくるしごと。

○　場合に応じての“しごと”

蔵書管理……選書・廃棄作業への支援
授業支援……調べ学習への協力、読み聞かせ、図書の時間への協力
協力拡充……教職員との連携・ボランティア（学校図書館支援ボランティア・学校元気アップ地域本部ボランティア）への活動支援・協働

▽　気を付けること

指導的立場ではない。連携を大切に。
方針決定や最終判断（図書館運営の重点や方向性、選書や廃棄）は学校のしごと。

学校図書館活用推進事業の目標

○　学校図書館の開館回数について
　平成 27 年度中に、週当たりの開館回数を平均７回に。
　平成 28 年度中に、各学校での開館回数を７回に。
　平成 29 年度中に、各学校で全曜日開館し、回数は７回に。
○　平成 29 年度までに、「読書は好きですか」という質問に対する肯定的回答のポイント数について、全国平均以上にする。
○　３年以内に「全国学力・学習状況調査」の結果における大阪市平均を全国平均以上にする。

大阪市　学校図書館活用推進事業　事例報告会　報告書
平成 28 年 10 月

発行日　平成 28 年 10 月 1 日
発行者　大阪市教育委員会
担当　大阪市立中央図書館 学校図書館支援グループ
〒550-0014　大阪市西区北堀江 4-3-2
電話 06-6539-3307　FAX 06-6539-3337